師の師の教え

― 先人からのメッセージ ―

第1回

別府湾腎泌尿器病院 名誉院長
寺地　敏郎 先生

泌尿器科診療・研究の第一線で多大な貢献・功績を残され、現在も精力的に活動を続けているエキスパートの先生方は、その師からどのような教えや職業観を受け継ぎ、それを伝えてきたのか。“師の師の教え”は、こうしたエキスパートの先生方にお話をうかがい、時代を超えた泌尿器科医へのメッセージを探っていく企画である。

第1回は、1990年代当時、腎癌や前立腺癌といった泌尿器科悪性腫瘍の手術として世界最先端であった腹腔鏡をわが国にいち早く導入し、その技術の開発と普及に取り組まれるとともに、後進の育成にも力を注がれてきた腹腔鏡手術のパイオニア、別府湾腎泌尿器病院名誉院長の寺地敏郎先生にお話をうかがった。

思いがけないきっかけから始まった、師との関係

私は大学時代、ヨット部に在籍していました。大学2年のとき、岡山の実家に帰省する途中、倉敷中央病院に勤務されていたヨット部OBの先輩に寄付のお願いに立ち寄ったのですが、そのとき初めてお目にかかったのが、今回、私が師として紹介する竹内秀雄先生（現 公立豊岡病院顧問）です。先生は当時、泌尿器科副医長をされていました。私はその後、1978年に京都大学医学部を卒業し、泌尿器科研修医となったのですが、竹内先生は私が卒業する頃には倉敷中央病院から京大に戻られて、泌尿器科の助手をされていました。

ただ、私はもともと消化器外科に行くつもりでいたのです。しかし、その他にも5つの診療科の候補があり、どの科に行くべきかを決めかねていました。各診療科の先生方からお誘いを受けていたこともあり、思い切ってあみだくじで決めることにし、最終的に泌尿器科を選び当てました。実はそのとき、くじに泌尿器科を2本入れていました。それは、ヨット部の先輩として竹内先生に誘われていたということだけでなく、何よりもさまざまな臓器の手術に関わることができるという点で、泌尿器科を志向する気持ちが一番にあったのだと思います。

一度見た手術は、次は必ず自分でやるつもりで研鑽を積む

こうして、泌尿器科研修医としての生活が始まりました。そんな中、とある手術のときのことです。竹内先生から「寺地くん。手術はね、助手が作るんや。鈎が作るんや。術者にここ掘れワンワンと見せるんや」と言われたことを、今でもよく覚えています。ご存じのとおり、「鈎引き」はなかなか術野を覗くことのできない、ある意味退屈な役割でもありますが、皮下組織や筋層をしっかり引いて術野を展開・保持しなければ手術はできません。つまり、上手な鈎引きが手術を進める上ではとても重要だということ、また同時に、“どんな手技であってもおろそかにしてはならない”ということを叩き込まれました。

また、そのことは、“一度見た手術はいつかできるようになる、ではなく、次は必ず自分でできるように準備をする”という強い意識を持つことにつながりました。同じ科の研修医の先生たちと毎晩遅くまで手術の準備をすることが日課となり、解剖書や手術書を何度も読んで綿密にシミュレーションを繰り返し、手術が終われば詳細な解剖所見の絵を描いて手術記事を作成するようになりました。最初のうちは、自身の勉強のために細かな点まで記事にしていたので本当に大変な作業でしたが、その積み重ねから、参考としていた解剖書や手術書の中の誤りや曖昧にされていた部分も明らかにすることができ、その後、腹腔鏡手術を手がけ始めた際の大きな礎になったと思います。

また、竹内先生には精巣腫瘍に対する後腹膜リンパ節郭清での実用的なクーパーの活用方法や、初期の経尿道的尿管砕石術で発生した尿管損傷に対する尿管回腸吻合術でご指導いただいたことも深く記憶に残っています。そのほか、先生が開発に携われていたコンパクトタイプの体外式衝撃波結石破砕装置や、経尿道的な空気圧式砕石装置の研究などにもかかわらせていただくなど、非常に多くのことを学びました。

一方で、泌尿器科は外科などとは異なり緊急手術がそれほど多くなかったことから、研修医時代のある日の午後は医局長の誘いで食事に、その後は竹内先生の誘いで麻雀に、それから病棟に戻って手術記事やカルテを書いて次の手術の準備をし、深夜近くになってからほかの研修医や看護師さんとみんなで飲みに行ったりしていました。このように教室はとても明るく、仕事も仕事外のコミュニケーションも活発な雰囲気があり、自由闊達な研修医時代を過ごすことができました。これも竹内先生をはじめ、さまざまな先生方との出会いがあってこそだったと、今でも懐かしく思い出されます。

日本初の腹腔鏡下前立腺全摘除術への挑戦、そして標準術式の確立へ

私が泌尿器科の腹腔鏡手術に最初に取り組んだのは1991年のことで、それは腎癌の摘出術でした。翌年には副腎の腹腔鏡手術を実施し、以降、多くの経験を積んで

2013年に竹内先生と一緒に。京都大学泌尿器科で指導的立場であった人たちの会合にて。

竹内先生と京都の祇園での1コマ（当時、竹内先生は京都大学泌尿器科助教授、寺地先生は助手）。

「手術はね、助手が作るんや。鈎が作るんや。ここ掘れワンワンと。」